雜示録日記

後篇

一

へ遠 3
962
6

明治文庫
遠13
962
巻6

朝顔日記巻之四　故芝叟遺話

九田踊　柳浪著

花は百日の好きなく、人は百歳の壽ねがしといへるハ宜哉大内殿の儒臣駒澤了菴老病ゑうけて、とやも危特ふせまさけるを、親屬ゑ枕方ゑ集合ていはゝ。我薄命よして貴子祥乙が行跡よりゑ見きまに、長く勘當ゑ和よびてそのゆくゑゑ知らず。おを各志らふくふと知り、了菴不肖れまといへども。形のごとく秩禄といなぶき、二代の君ゑ仕て、軽からぬ恩命とかうふまに、剰中老の席をを汚しつ。そもそう政事加談の職といへハ。戦場ていハ軍師の

指揮をるがとく。治世の掘密に参判ねすがとして。當家
ふかいてハ。古来よりとを一個ふかぎり。比ゑき重職ゑり。
かくる其裘を襲んどもの。姪兒阿蘓次郎ねらで外ゑ。
さまと渠もと青雲の志あり。親衛を望む嗚呼の漢
ねれべ、とが跡式に譲らんとゝとも、ねでうたやをく承引
べき、さるふよりとも。死たりとも。全然病重しといつゝり。
急ぎ都より呼くぐし。ふの遺書を眎。各餘儀ゑく勸解
相續せさせたまハるゑ。今しも目に瞑ぐとも。いさゝう
憾ハのふらじと。叮嚀ゑ咐囑しが。程もあらぐ無常の風に
さそハまて。あハを敢果かく黄泉の旅ゑおもむきける。去
程ゑ宮城阿蘓次郎ハ。去ぬるゆふべ、暴雨ゑ沮らまて。は

志ねく明石の浦ゑ船泊せしが夜ふけ人静まり。月いと
よくてをたるを愛てあてしが。偶ゑ隣船なる琴のこゑと
仄きしよりくらずも。秋月弓之助が女子深雪と環會。
深雪が貞操のせちなる情ゑ絆さを。直ゑ仕を遁とせし
をうらゝかくゑねくも。深雪が船俄ゑ蓬に拽あげて。馳
出せしゆへ。たちまちまち西東とうき別をしてかゑく
都ゑのぼりをき。故の下河原ゑ僑居たをども。肚裏ゑハ
その人を忘るくひまねく。猛き武士といへども。戀ゑハね
もいよいるふらひ。ねゑたで快々として樂します。浩処ふ
周防の山口ゑ。火急の消息して。伯父了菴重き病ゑ伏し。
息あるうちふ。ゑべきふとあり。斥時もくやく下来べしと。

いいおこせたりけきバ。阿蘓次郎ハ又しも席ゑ煖むるに
いとまなく、恩ある伯父のあとをおきべへと氣せっハしく思。
取るものもとりあへず、その日のうちふ起行して。且暮途
ゑいそぎて。ようけハ程なく山口ゑる。駒澤ゞ邸ゑいたりぬ。
親屬眷族。まちまうけて阿蘓次郎ゑ對ひ。家主ゑ菴。
くや仙去たり。故翁臨終ゑ寫めらるたる一書あり。和主ふ
遞與くまよとの。遺言ゑ告ける。阿蘓次郎聞もあへず。
双眼涙ゑうちうるゑ。忙しく遺書ゑ披覽きバ。ゑ菴代こ
主恩をかさね。莫大の登庸ゑ遇て。かくる重職を蒙りぬ。
さきども何一個寸功とも達をして今徒ゑ席の上ゑ終
ゆきバ。おきのゑ遺る恨るゑ。ゑいを沒曲て。ふの家督を嗣ぎ。

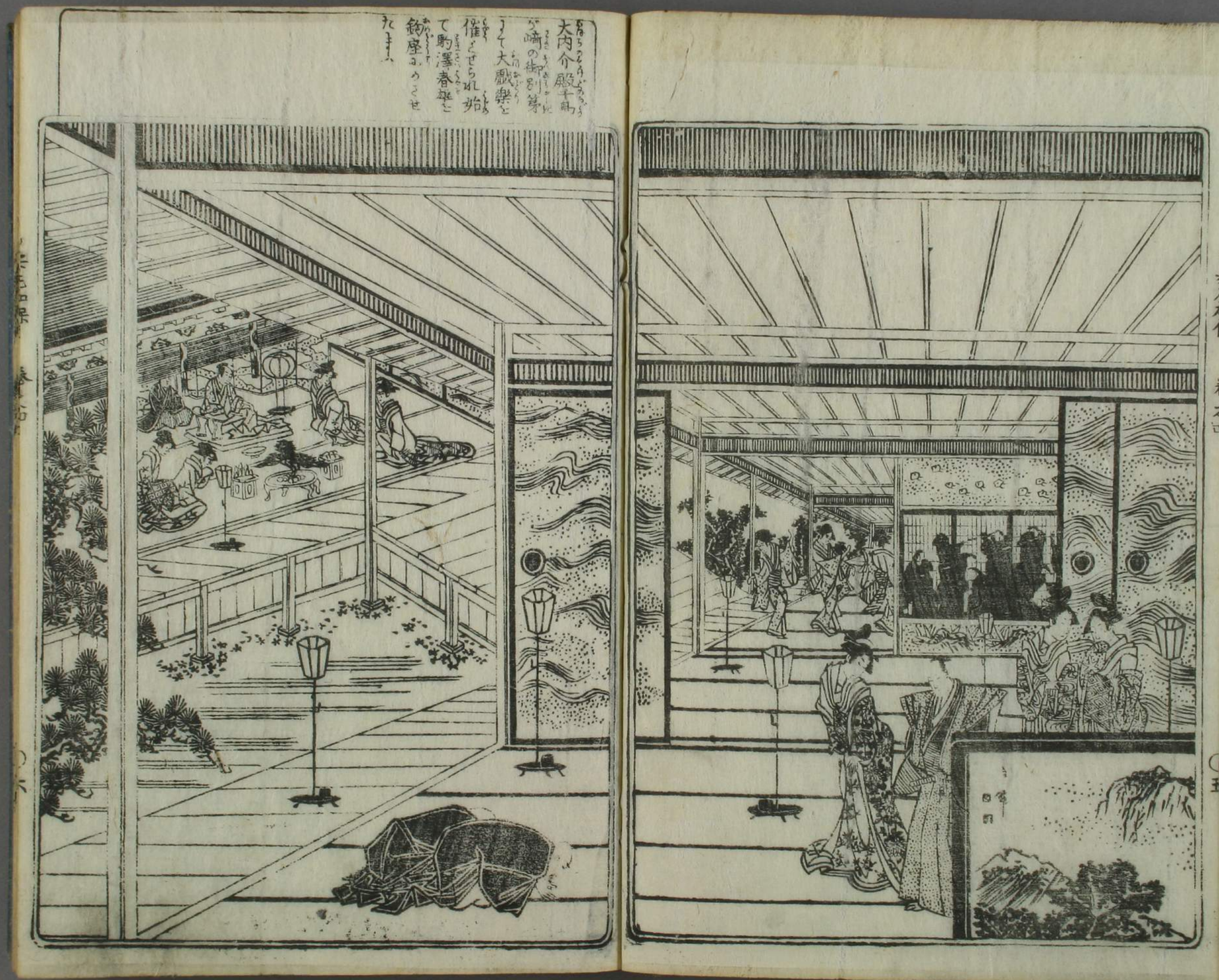
ときゑ取ゑ代ゑて。國のたゑ家の為ゑ精忠ゑ盡しくま
よと。ふろへる手して。いとこまぐくと書たるふそ。阿蘓次郎も
ほとゞ悲嘆をかし。義理ある伯父の死後の托さても餘
義もゑきふとどもかゑ。己ゞ宿志ゑ遂んとて。強て推辭ゆ
道ゑらしゞと。心ゑ決して允諾けきバ。人ゑ擧ゑて悅こび
けり。やゞて一通の願書ゑ。ゑ菴病危きふよゑ。姪宮城阿
蘓次郎ゑ。急養子ゑるしたき趣ゑ志たるゑ。親類の何某。
ふきを月番の家老ゑさしゝ出し。その執成をたのみける
ふ。ふの由家老衆ゑ。上聞ゑ達せらきしちべ。事故ゑく御
聽をゑあゑて。家督相違ゑく仰ゑけらきぬ。阿蘓次郎ハ
ふきよゑて。麾ゑ家を繼。姓名ゑあらためて。駒澤次郎左衛門

と称しけるいまど中老席とハ仰せ出さるなど。先規のおとく政事加談役よそをなきけるおもを全く次郎左衛門年弱けをとも。才學世に勝れ。そその性の温厚の聞あるよよをとそ。やゞて次郎左衛門ハ父が喪式祭祀ふど。形のおとくとをおこなひ。七七の忌もはてるけをべ日おとふ築山の館に出仕なし。奉公をぞてげをける。次郎左衛門養父了菴が遺言をバ心骨ふ浹ておを式守を。まさら君の御大事ハ一命ハ塵芥よをも軽ど。無二の誠忠と盡さんと。准備しぞ奇特ぬる。もとよをおの次郎左衛門。加談役のおとるをバ。平生家老衆より政務のおとを談せらるふ。職分のことを

まバ一くおれを辨論をるふ。その判断をるふと明白をて緊く道理をおるひ。まさ人をぐをたる卓識ふどを。あをけるゆへ。家老の面々大に我をを。其才養父了庵よも出蓋て。當世無双の壯佼。後来ハ國器をもたつべたものをとと。いと頼母しくそもひける。さをども次郎左衛門ハいと謙遜。いさゝも唐突たるおとなるをねバ。人の眼穢をもたゞざをけを、かくて許多の月日を過ける後。當主大内介多々良滿興朝臣ハ。往歳衆勤して。鎌倉に在せしゞ。當時新大磯の柳巷第一の花魁松葉樓の瀬川とふもの。艶色をまどひ。晝夜酒色ふのを慰ませたまひ。營中の御勤も懈ゞちふふぞ。誠忠の近

臣どもかいろ〳〵諫言奉りけるふ。そのたびおしとゞめて總て御手討なれさせらゝ。おとしもあら〳〵ふと御所行のゝ多かりけり。おのこと反うゝ幕府ゝ聞へしふや。ある時管領上杉殿より。大内家の長臣。冷泉帶力とゝ者を召ゝ。滿興殿放蕩のきこへあり。事あらさまゝふらざるうち。再應諫て行ひを改めらゝるバ。珍重なり。倘も其事募ふゝあれ。數代聯綿とゝ家國ゝハ換らゝまじ。早く儲君を願いて介殿とハ押籠ととて志ろべしと。御内意ゝ仰ゝとゝさゝぬ。冷泉帶力。ゝしとゝ承たまハりて退出しゝ。周章をゝとおはゝとふらず。いそぎ本國ゝ急書ゝ下し。管領より志ゝの御内意あり。事遲ゝ及ビ

ゝバ。臍を噛の悔あらん。いち早く評定ゝおよいるべしとの文言ふゝ。かくてゝの早打。寸刻ゝ爭そひ馳つたけるふぞ。當家の一族山岡玄番允を始し。家老中列坐ゝて。志の急書を披見るゝ各色ゝうしふひ。志い由ゝ由しゝを大事ゝ。志ゝまバ大評定とゝすべしと。忙バ志く一藩中ゝ令下て。騎士以上のゝものども一人もゝあらず。惣出仕とゝふさしめ。大書院ゝハ。山岡殿と上坐し歷々の衆。綺羅星のゝとく並居たゝ。藩士の面々格式ゝ照ゝひて坐ゝ占さしものゝ廣間ゝも居ゝまゝ。間ゝと緣側まで。人ゝらぬ所もるし。大内家の大身ゝるゝこと是ふても志るべし。月番の家老相良主馬。滿坐ゝ見るゝし


大内介殿千助
が嶋の御別墓
にて大獻樂を
催させられ始
て駒澤春樂を
錦座ゑめさせ
たまふ

帶刀が来書の趣を披露せ。御家の安危よの時より、たとひ小禄の衆たりとも。御上の為ゑ忠義を重じ、おのゝ所あるべ。憚ゑく申見らるべ。とぞ叙ゑる衆人こを伝聞よる。一同ゑいつと平伏せしぞ、ふきまで諫言せしものども。盡く御手討ゑ遇しと聞怖おのゝたゞ眉うちひそめ。議合のをゑて黙々として一言も發さるものゑし。まゑ重職の人々詮議區々ふるといへども。いづを今一應も。諫言を奉るゑ忠ろぢと。ゑよりふ。させる良策もあらざるが。まづその日の評定いさづらおゝ〳〵ぞ見えふける。おくて三日四日ぎあいぞ、うちぼきゝ例のおとく。藩中惣出仕をふしけるども。家老衆とは

志ゑ異ゑる一語を出をものゑあらざりけるる。駒澤次郎左衛門ハ。とゞ弱年の分ゑ省ゑ。さたゑて影の盡くの中にハ。何とゝいひ出る人もあらゑと。頓口無言ていうえ居たるるーぐゑいまゞ評議さだまらゞ。かくいたづらふ日數のたらゑくゑとゝ。もどかしくゑもひ。さの時列を出て云やう。不肖の僕歴々の御前を憚らず。さゝ出がましくゝ。當家危急存亡の秋ゑあたる。鄙衆あるを申見ざるハ不忠なるべゝ。殿さでゑる放蕩ゑ在ますとも。もゝよるる聰明なる御性ゑをべ。ひとをら臣たるもの誠を盡いづくまでも。諫申をふ志くいわらじ。僕ゑ仔細の侍るる。諫言言上やうの手段あをべ。あいを御ゑると

まをかうふまいそぎ鎌府へまかまで下ぶがおそらく
仕課ざるまとハいまゞと言葉ゑ放つてまうしけり。
山岡玄蕃允ハ胸ゑ一物あつて。かく殿の不行跡ゑる
沙汰と聞よまを。謀成もまつと。ゆゞく肚裏ゑ悦を生じ。
己が嫡子ゑ。儲君ゑ立まくれりゑゆへ今もし駒澤ゞ
異見を用ひて厮ゑ鎌倉へ下しまゞ。極てまゞ大望
の妨ゑるべしこそらさぬ鬚臉ゑおし。駒澤が語をじ
きて殿へ直ゑ諫言をハ心得ゞ。まをまで諫し者を
手討ゑをしハ。幾個といふまをまを。ず。今まを諫んとせ
ばいとぞらゑ激怒をはじ。損ゑて益からん。十全の奇計
もあらざして。古老の人をバ閣とき。和主が分際ゑて。諫

爭かゞくい倍痛しひいえりさをとさくゆをべ。次郎左門
うちかしまを。まを仰ことく僕ゞとき。その任ゑあたら
ずといへゞし。今度家督の御礼を稱し。君邊へ近つれ
さへいたしまへ。施をべき一術のをべるからゑ。ゆゑゞち
ゆ僕へまの役仰つけらをうしと。丹誠面ゑあらハれて
志をうゑ申請けをべ。相良主馬まをゑ同し。駒澤氏ゞ
思慮あるこしハ。各もまらうをとを形。さをバその望ゑ
まうせまを。をと下向かさしむとも。萬ゑ一失もきうう
ゑし。主馬ゞ腹ゑ代てうけあひ申。各まをゑ扶せらる
べしとつまをまを式さいて同列あへて拒むものかく。異口
同音ゑまの議至極ゑよろしかるべしと。諾かひけるゆゑ。

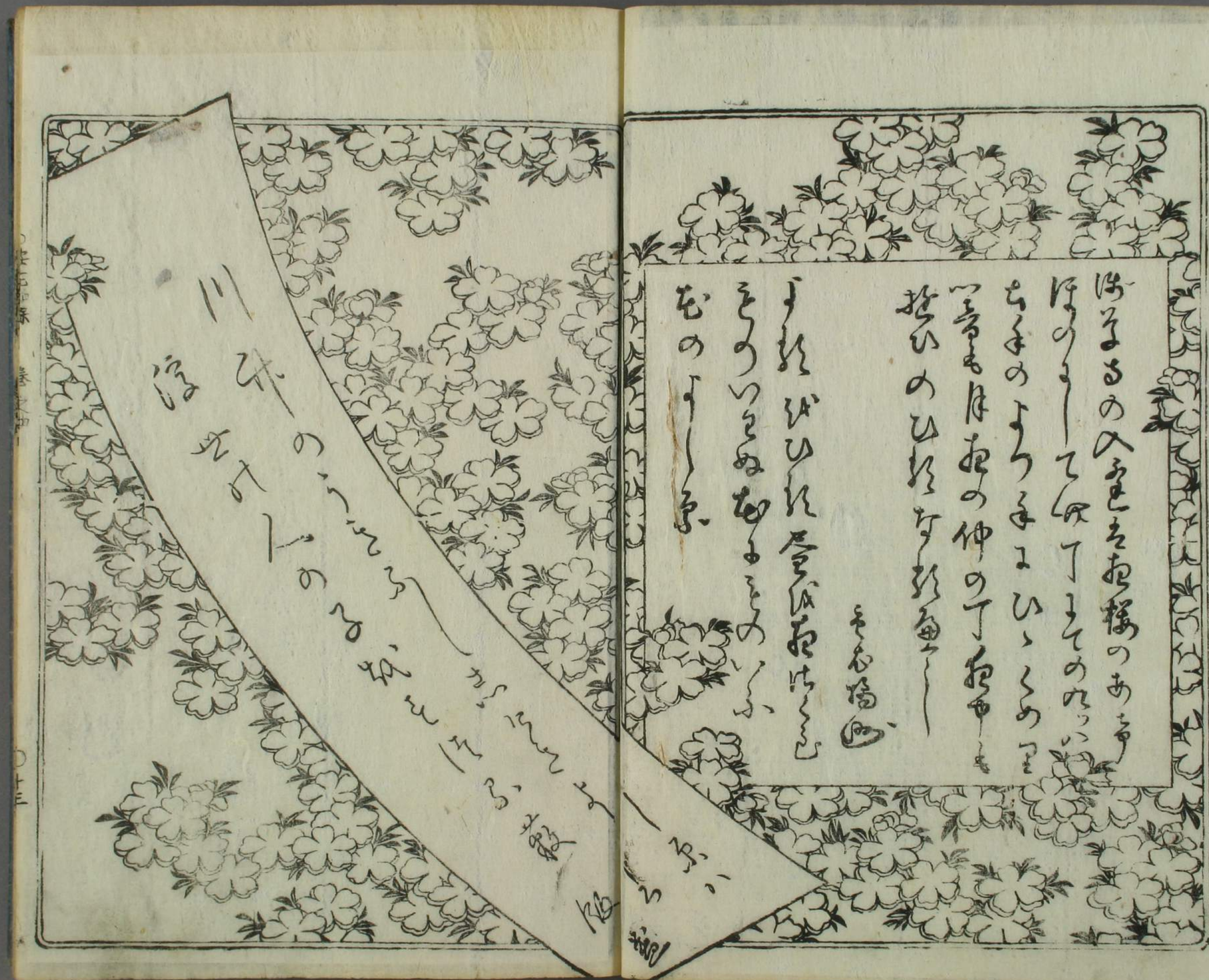
玄蕃允もせんをべわく。多分の衆議ゑ悖ゑかたく。澁澁承引て評論頭ゑさとまゑぬ。ゑまふよゑ相良主馬ハ忙しく同僚連書の返簡ゑ認たくめ。使を馳て。此由と在鎌倉の同僚冬泉帯刀うとへいひやゑける。ゑの時まもく。山岡玄蕃允もこが企叛の荷擔人岩代瀑布太といハものゑ密書を下しぬさるほどゑ大内殿の在せる亀が谷の上第ゑい。ゑさい駒澤何某とゑもの殿へ諫争の為として。近々下向せるよし。その風聞かしがまし。近従の人々いちこやく。ゑのよしゑ殿へ言上ふけまバ。暴姓烈火のごとき大内殿。近従の語をもあへず。勃然としふるひ怒らせたまい。什麼の次郎左衛門とやらん。ふまぬうゑたる小治郎ゑ。予ゑ向つて異見などゝい奇怪のいうゑ一言ゑても傷觸ゑ申さバ。たゞ一刀ゑ討放しくきんと。息まき高く罵たまゝ。近従頭岩代瀑布太御前ゑむうひ。傳へ承いる。かの次郎左衛門と申ものハ。ゑまけしからぬ白者ゑ。もしも御目前ゑちらぼけたまいゞいうゑる搗事とゑ仕出し。ゑよゑき御恥辱をうけさせたまいん。さゑらバひとゑとゑの御手討ゑとふていよゑも御憤氣ハくきさせたまいゞ。ゑちゞ渠衆着していうほど拜謁ゑ願ふとも。絶て御値ゑうらんゑいと。ひそうゑ山岡ゑいひ来したる密書ふゑ。ゑくゑん詞をユゑして讒言とそ搆へける。大内殿い天のゑかせる英雄とゑバ。きハゑて怜悧御性なるとも。古来

よこ名将も色ふハ惑たまふらひ。況て麹孽てふるの精神を狂ハしたてまつる。弁才まと諫を拒ふ足。總ての人を蝿虫ともおぼしらさねバ。今かく暴布太ゞ激發るとうゞし。いらさま汝ら申をおとく。次郎左衛門い匹夫下郎見もふうゝ眼の汚。汝等志うるべく計へと仰をふゞ瀑布太やどゝ笑とゑし。仕をまゝたまといさをける。日あらず駒澤次郎左衛門鎌倉ふくだまて。由居ゞ濱の御中屋敷ま落つる。家老令泉帯刀ま對面とゑゝ。よろづ示ゝあいすことどを あまて。直ま執謁とぞねゞひける。殿ふい岩代瀑布太等ゞ譏ゑ信ド。一度も召るくふと仰けきバ。さゝもの次郎左衛門もせんをべるく。今日明日と晩て。いたぢらま一月

ぢうまを過しけま。帯刀ふうくふきと愁ひ。ひそかま次郎左衛門ゑ招きていろぐせんと商議をゑるせバ。次郎左衛門ゝふやう。さあらい御近従ま たよま。如此くくはゝらひたまへと。そゝやきける。帯刀ふきゑ聞てふもぐどゞふま合へまして。そのゝたぞまるる殿の内執事。湯浅勘兵衛ゑ呼よせ。次郎左衛門ゞ申せゝとを口寫ま吻附けまバ。勘兵衛心と得て。詰且御前ま出小臣前日狂ゞる巷説ゑ承ハまつ。そい先頃君を諫ゝ奉らんと。廣言ゑ放ちてまゝ下ぼる。駒澤次郎左工門度々執謁ゑ願へども。今まだいて御値るきハ君全く渠ゞ鋭氣を嚇きたゝ由ゑまと。彼所此所まて流言。

弥生の頃八新
大阪の街頭
ふ。幾百株の
櫻花と植ま
らぐ吉野泊
瀬よも勝りて
春色濃しく
嫁客うち集
合殿の花時
對酌を取し
人間の戲樂
と稱す繁華
なるかりうし

新大納言なくなる後君
三浦樽の瀬川
ゲ嬪郷くる容
止とうすそのこころハ分てゝのの
君國色無双
ゲ嬪とうひ傳ふ
情田ハ文武
讀て知たすひ
丸



ものゝいよし。相公の御勇氣よも似げなく燕雀よりもし
き一個の駒澤。縱令緩怠なるふと成申出すとも。只御一
句の下よいひふせたまへべし。志ゝ一ふまゝ煩擾ふかば
さまるべ。御目ゝさるゝやいな、一言もいとせとず。威嚴
を示し。即坐に追黜たまへとき、渠もといふなる巧な
宿搆居とも。支度たちまち相違して。鼠のごく逃去を
待らん。さあらばいたう心地よくもべらんと。語の裏
に猛勢を含。迂遠しふ激ましたてまつりけきハ。大内
殿にく聞召を。いうさま本府にて。家隷も多うる中
ふ。渠一人抽んて。おとさらいまゞ弱冠の身として。予ふ誅
言成るさんとハ。さて〳〵斗膽叙れ。さらずいまゝ世間

をもらぬ井の蛙。向ふそどの奴才め。必竟武邉の大体
をもときまへぬバ、大國の主ゞ逸遊を。驕奢のおとく
心得たらん。好〳〵渠成呼出し。女どもふ大戯樂させ
て肝を潰させ。場蓋とさせて弄東西ふ成しくまんこ
近臣に命らを、とやく准備をいそゞせたゝ、おゝ
ふよりて奥女中三十人。生藝者三十人。熟藝者
三十人併せて九十人の美女成をうつ、いとゝやびやう
成る一様の衣裳をさせて。千鳥ゞ崎ふる御別荘に成
いて。大戯樂をぞ催さる、とやその日ふもふまけ。
無ふい花燈を點し羅ね、椽側ふハ。捏く緋と緑羅紗
を二條に布とた。梨園の子弟ハ。片側に並び居て。

吹彈に妙なるをしむ。殿はいかの駒澤次郎左衛門を黎明に召よせて。小書院にいらへさせ、やゝもふべきちゞきて。戲樂なるをめさせらるゝ。さて九十人の戲児ども。總て嬌艶に粧ひかざり。とのゝ綾羅の袖なる飜し。身の軽きこと、蝶燕にもまされらず。次郎左衛門が語居たる座敷なる輪なる舞環つ。絲竹の調ハそゝろ〳〵くも耳なる悅ばしめ。戲場の飾い花やぎて目もあやなる。大内介殿いらゝれば。戲樂を半に息させて。次郎左衛門を御坐の間にめさせらる。大内介殿いかゞ〳〵。次郎左衛門とやらん。何奴なるをバ。予が猛威を冒して異見とせんを不敵ものゝいふなるを相貌ふるにやと見まほしくれ

ばせ〳〵へ。女中ぐらいさらぬ。戲児い戲服のまゝふて。殿の御側に。稲麻のおとくかしぐきけるが。皆いひあいせるがおとく。名ふゝ〳〵。次郎左衛門が。手姿なる見人とゝを一とおぞ。ようぬ。やとら駒澤次郎左衛門。膝行ふて。御眼前にまうでいで。敷居一つなる隔て。額をつきてうち畏ゝつ。内執事湯浅勘兵衛。奏者として。駒澤ろ庵が。躬次郎左衛門と禀あゞ。おのゝき殿い夥の女どもとともに。瞳をさだめて商ハせたまふ。おの次郎左衛門生を得て。容貌美麗に。氣宇軒昂見えて。その人品のたをやなるふ。ほよき心を志ひてくいへたをバ。ぶよたけの心地して。ゝをゞふをるべくもあらず。加旗ずその挙動の滿

[illegible]者曰ふの時
[illegible]郎左衛門が好
[illegible]と詳らかに
[illegible]んかいとく
だ〳〵きろ〳〵
そのうへ夜裳
のあの髪
たちの風とう
ものの時代つ
を偏行ふく
その〳〵ぬいと
いまじとなりふ
風俗しいまの
人気ふあいま
いぶかしい人
もあるぬん
ろうべやまの
唄よいろぼ

洒[illegible]ろいさらふて。今日の拜謁ゑ打扮ゆる。長上下の着
やう。小袖の染色といひ。きたてざかの通ゐる。髪かさちの
今様よいそぎう禁わゑて。何処ゑ一點の醜態ふし。ゆく
きば殿をそじゆ。あるかぎゑの女中さち。きばし春戀
て。肚裏ゑ十分の愛慕をさへ生じける。さまども殿い早
追たてんとおばす。御氣色ゐるゑ。中ふも專房の婦人を
と殿の御袖をひきて。今をそしちう召させたまへと。
さやけば。殿もまと聢と。御覧あるべき。もんきさおくろ
ゐきば。次郎左衛門。ちこ。ちとう。と尻声高く呼せたまへ。
次郎左衛門。さゝゝ怖るいろふく。やはゝきんで頭を擧
きば。あたまい銀燭點し羅ねて白日のごとし。女中がさい

ろうとつとり
きと金五郎に
あるのう夜ゝ
風ふく夜ゝ
も凄ごうんで
ゆをしかと
くとう唄ゐつ
ろうどかれば
ふの比はまぎり
てゐこゐうや
ぶとづ〳〵えき
せぞのゐろう見
しと水ちん今
の目ちつまとば
ふゆ[illegible]ゐ

きこゑゑ。御盃ゆをゝめたてまつきい。殿ゑも次郎左衛門が。
進退の閑雅たるとおろ。れのづから御心ふかるい。御顔でせ
やゝやいらげて。御機嫌うるはしく。やとら大觥ゐてゆしあ
げらを。そのまゝ。次郎左衛門ゑらぐさきける。次郎左衛門い
やゝきくこれをいゝぐき。ふゝゝゝと一盃つがせ。たゞ一息ゑ乾
乾浄〻と飲はしけきい。女中たちいまを見て。ゑきさら
ども微笑ぬ。殿いき。のあゝさまふいゝ興ぜさせたこひ。次郎
見事。おさやう。と仰するぞ。次郎左衛門。「ハヅト應。まゝしも
了髪どもゑ一盃もらせ。まゝ一息ゑ飲ふしける。女中達い
どよゝあひてざめく。殿いかとねて「次郎左衛門。汝い筑紫
の産るゑよし。さあるゑや。「次郎左衛門。かしこまを。正是上

意のおとく。郷貫ハ肥後の菊地よて侍ヲ。仔細ありて國を去。只今ハ伯父了菴ゞ家督ハ下しおゝ。不思議よも君臣の因ゆふし奉ヲ。感佩造化よれと。聞えあぐまべ大内殿るるゞ汝ハ儒者の孫児。さゞらて頭巾氣るるものるらんとたもひしゞ。今日の打份ゝぬいゞ風流たヲ。折ふしハ遊里へも往つらんる。次郎左衛門うけたまハヲ。いうふも御意のおとく。在府のたきくふ。伴よさそハを。深川の妓院よまゝヲれひしゞ。れ日よを喜瀬川と申処ハ日本一の花街よ侍ヲ。那方ふる。洛陽店の夜珠とゝ女よ。馴染とかきねさらひて。おゝ夜服もその夜珠ゞ。といひさし。又佶とふヲを俛けゞ。金殿莞爾と咄ハせとまひ。次郎左衛門。くるしゝからぬ。そのあとまゝせ。てさて面ゆ上よ。その夜珠とやらゞ何と志たるぞ。次郎左衛門まをくく慟慟よ双手ゆ突。小臣ゝの夜珠と始て一坐仕つヲし時。かをゞ申べるハ。郎ハ山口の御藩士ねるよ。郎の御主大内介様ハ。鎌倉一の風流容と稱をたまへ。その御内よてあヲねゞら。ゝの打份ハ何ごとぞ。奴よ任せたまへと。頼母しくまうをふ従せ。よろづかをゞ計ひふねヲ。今日の夜服もうをゞ截縫ていひき。さてしも喜瀬川の遊君ハ。はねゞ深切よ情ありのふいとほこヲかよ悠揚げてゞ〳〵感服たる面もちねヲ。女中とちハ袖打掩ひて。笑顔ゆかくせバ。大内殿肩を聳せ。御声をげしく。汝

獨り信ぶつて喜瀬川ぞうりを日本一と稱賛とそ。旁痛きたとねを。もとや大磯の景氣い見たるう。次郎左衛門面答けるい。いまぐ大磯い。一覧仕らずいへども。およそ女の情のふうきまして。その所の繁花ねるさとい。世ふまる類あるまじりく。小臣はじめてさの地よ下を駿き入れと。皺面をくをて叙ふける。大内介殿さのびあへず。呵くと笑ハせたまひ。海ハ田舎よを下をて。やうやく昨日今日。いまぐ大磯の大廓ぞ見ぬものう。さつふも道理。もし見せたらば何とういとん。褒る語もあらじ。いざさらば。今よりいとをを性ん。そをとやくと。近臣等よ吟味たまへば。昵近の人々いそがハしく供支度をねせう。その

まく。御庭さそねる水門ぞひらうせ。美ぞ花くせし御座船よ召を。次郎左衛門ぞ左右よおしぼうきて。直よ大磯へといそげせたまふ。おくてこや千鳥ご崎を後よおし三叉ぞ糾よ見ふがしたまふ。その絶景ふはうをねし。殿よハ次郎左衛門鎌倉ぐちてるれば。案内ともきらじと。御機嫌のあまを。さの舟行の雄手。雌手ふる。名勝どもをおちもねく指點していひきうせたまふ。次郎左衛門あきハ二州橋とて。納京よハよきとろぞ。其処い首尾の松。東橋といふぞ。向ふよ見ゆるぞ向嶋ふるぞ。河西太郎。待乳山。関屋の里。浅茅原。鶴の森。五百崎。牛の御前。あきねる隄よ。鳥居の半

よ。上あらいをたるい。見巡の稲荷。来方よ駒形堂あつる
をれ〳〵遺せ。這方の塔ゝ見よ。あをきを名高き浅草
寺ゝ。さてふの駒形よてたもひ出〳〵つ。

君いまいま駒形あそぶ
ふい大磯の遊君。奥州ゞ。嫖客ゞ慕ひて。口騙たゝ句ゝ。
傾城とゝものいげよ優〳〵ものよあらどやとふと飽ず
〳〵も。長くとものゞたらひたまへどふ。早御船もはき
たゝふぞ。殿い次郎左衛門と従ゞへ三谷渠よ上陸せ
たまひ。土手八丁ゞ歩行たまへ。交加四手の声い正し
く。帰雁のゑさをくゝとあやまたを。さを〳〵て衣
紋坂をふえ。見うへの柳ゞもとよ。とや大門口ふ

作者曰在下
〇まこと大都の
名勝を一覧
せんべ唯人
聞に任て記
せり。おのの
紋の杜撰
ちんおとた
おこっ看官
幸よ海涵
たまひね。
新大磯の風
越るをこう

入たまへ。次郎左衛門母胎を出てよ。はゞめてかくる
仙境よいさ〳〵しゆゑ。且驚き且呆きて。肝ぶをたる
形容ふ。七座の大院ハ。世よ高くさへ虚と實の仲
の丁。諸ゝけ手くだの情志る吾嬬女郎のこをつよ。
意氣地をくらぶ京町や。今宵ハ誰と伏見町新町
角町めぐりゆけば。水戸屋の燈籠とるゝ灰をゆ。誰
や行燈うげあゝく。横町の小茶屋よい。江戸素掻の声
かゝしゞまし。ゆのごろ稜晨花魁よい。舞鶴楼の頂山
舞鶴。三浦楼の高尾ハ。清客よも名ゞ志らをつ。その
ふゝ。角の玉屋の薄雲ゑんと。呼出〳〵の揺錢樹。かゞを
志らゞ。ふを等の姉妓さち。支那の和朝の綾錦を身

ふ纏ひ。小裙ういとまて。新艘妓雛とひきつれ。己ゞ記紋の大提燈と前ゝ點させ。八文字と踏て。金蓮式をくむ。おもよめでまど〳〵。嫖客いやくさきをふさぎて。道もさまあへど。次郎左衛門ハ志ぢらく殿よとぐを。とある檣子ふとちよう。さし覗バ。花のおとき美人満満て。蘭房のかさまう

「ゑゐくやをくるま井の。ちぐるくるとしのあさ。
おぞのまくゐるをだをがを。

と一関の河東曲を唱たるハ。志らず何苛の人ふるふやそ。の声妙よいとゞづらし。大内介殿ハもとよりおん潛行ゆ在ませバ。次郎左衛門と。近従少さらし具せらを大磯の仙窟とゞぐりゐく。ゆをまいらせらを。やゞてまた御宿房ゐる。松菜屋へ入せたまふ。もとよりを志の院子ハ。すぐを。て繁昌せし。由へ。いち早く簾子たろしあて。店のさまいと志ゆやうゐを。殿の御愛妓瀬川といふハ。いまゞ私下の世話の須よりを賢氣ゐる粉頭まて。生を得たる國色ハ。一咲百媚の麗姫ゐて。瀬川ハとくよりを待まらゝけ。妹妓ハさらゐを。夥の藝者どもと洞房よ集へて唱ハせ舞せ。百般趣きある遊ごもをゐ。大内殿を頭待たてまををぬ。そのとおろのさまハ。伽南の柱よ。水沈香の床縁ゐを。上頭ハ明の仇英ゞ。密糸せし。一幅の金谷園の圖をかけつ。玉の瓶子ハ名も

ましらぬ珍花ぞ挿ミ。火鼠の皮子安の貝こそ敷けれ。琴棋書畫の調度。あるハ和歌の書巻とも。棚さかざつてうづだうく。茶香の具ハ七寶ぞ打ちつゞけたり。盃盤の類ハ。總てその時代の高明描緑漆青磁器も。おほくハ應天府交趾の産よあらざるハし。さてまさ麒麟の膳天鵝の肉おそ見えたらね。山海の珍味ぞ盡し。美酒ハ新豊よも優つべし。おとさら余碧の屠風ハ。燈燭ふ輝煌あひて見るふまでせく、ゆどく喜見城の樂も。ふきよハ過じと見えふけ是さしもの次郎左衛門。ふの大繁華大繁富ぞ着るよ是も。只あきをよあきをて。まばらく語ふし。殿ハふの動静ぞ御覽じ。

次郎左衛門いうよ喜瀬川といづをう勝をる。次郎左衛門ひを伏して思を入。前よハ小臣眼界狹小ーーと。ぐ日の本よ。かゝる極樂國のあるふとぞまらず。喜瀬川のゝを遊處の最上かをとゝくろえ誤まち。過當のふとを禀あげ。千悔ふよびがさくいと。ふうく慚愧ーていと面目没風情ふを。殿ハ渠ぞ徹底感服せーー体ふるを。ふのたびてを渠ものといいふせたをとふよふき御滿悦とぞ。見えさせたまふ。さをとも殿の御心よハ。次郎左衛門ふうく材あるものかをどもいまぞ烟花の情曲おどハうーかるべう。れぞせーぞ。酒酣なるよをを。次郎左衛門坐配をふーて興ぞ添るふと。不文不武有趣出奇。間をあハせぬ。ふう

のこゝらず。その性もと温柔ふるふ。吹彈歌舞の雜藝といへども。一個として精熟せざるふし。正まさに天のあたへる才子といふべし。さるほどうて殿ハさらなれ。瀬川とてどの。堅よあるかざるい。二ふき風流士かゝるとて。ふゝくゝで暴ぬ。次郎左衛門かくまで殿の御心ゆかるひしをへ。いつとなく御側去らずといふ。たけるもの。まく烟花のものどもを一日としてれもひ出さぬ。まく。殿大磯へ入らせたまへ時。自然次郎左衛門御供せぬるい。藝者ともまで。くるとぞれつゝしゞり。挙て殿をうちむかひ。相公次郎さんいへ。とうかゝびいるとぶん。かくて次郎左衛門い。遂ゑ日の出の出頭とゝる。殿ゑも今ハ次郎左衛門ゑくてれとおばすゝどの寵遇ふゝふゞ。近從の儔ふゝくさを猜ゑ。いゝふもして。御側ゑ遠ざけんと。多方計較をゑして悶搔といへども。古今獨歩の人傑とよばゝる次郎左衛門。その動るとさゝろ。さらふ一点の破綻かく。つねゑ殿のおばすさとハおゝうさいまゞ御意ふきうちふさと。ゝゞ。癢きとゝろふ。手のゝゞくやうゑ物しけゑ。また花柳へ嫖蝶たまゝ時ハ。次郎左衛門奇異不思儀ゑ新しゝ趣向ゑもひつさ。種〻様〻と堅ともちけるふゞ。ゑまゝふ百千の幇閑拳頭と集合ても。たゞ一個の次郎左衛門ゞ風韻ゑれとゝべさとゑしゝさゞば大内介殿ハ。要時も御側

ばくふしたまいず。やがて一の侍臣とおぼえまけつ。

十回　文

一夕大内介殿い松菜樓まて。大燕のあそびと催され。宴くてのち。花魁瀬川う洞房へいらせたまひ次郎左衛門ふ命ぜらを、渠ゞ手ばけたる新飜の手妻と一張彈させて瀬川ゞ膝を枕ま。とろ〳〵と御聞寐入あらまな。ゐの時次郎左衛門。瀬川ま對ひ殿まいうまく睡せたまふら。瀬川うち点頭ばく。ふいゞく手ばあて御鼻息をうもいびひ。いとよくゐまづまらせたまへまとふ次郎左衛門ハ三絃子ばさしゐき。何うハまうず一通の文わく物を懐まとりいだし、ゐを瀬川ま手遊興をきバ

瀬川ハふつたまとをとらひて。ゐを瀬いたゞきけると。近從頭岩代瀑布太。隔房まゐの挙動瀬見ばけ〳〵うバ。明の日竊うま殿へさくやき。駒澤瀬川と密通せ〳〵れぼへい。その縁故志う〳〵ゐまと。言上せ〳〵うバ。殿もほとほど不審ゐぼ〳〵。いかさまもひあいせ〳〵ゐともあるぞ。予那里ま臻るおとま。次郎左衛門ゐ〳〵ばをざる時ハ。花魁ども極て叮嚀またづね問ま。仔細ゐそあらか。汝まづゐのおとをかくし。かゐらず〳〵も色まあらハまゐと申うをとふうくいま〳〵めをうをける。まゞ一夜例のおとく。次郎左衛門ま。一張彈させて。瀬川ゞ膝ゐ枕とし。御鼾眺雷のおとく。森たる状〳〵て覘がひ

たまゝ。かくとい夢よもさらずして。瀬川ハ殿の寝息を
かうがへ。袖より封ぜし文とりて。次郎左衛門を見て。
媚たる文を。およびおしゝよさゝいざせバ。次郎左衛門も
まさ。懐裏さがして文とり出し。互ゐに「をうう」ハす。
登時殿ハ。瀬川が文と取んとさゝいだせ〳〵その織手を
志つらと捉せらき。やとらつと起たまひて。「やとき」不義
もの見付さとさけバせたまゝ御声の下。かねて手配
あるしよや。近従どもぐらくと踊出。次郎左衛門
刈おつとるまく。次郎左衛門ハ手ごやく。文と燭よさ
しつくきバ。そのまくぴつと燃たちける。上意とおゐ
かけ左右より捕よかくるゝ。陽炎稲妻。神出鬼没の活

伎よ。殿ハ怒の徒声をるどく。次郎左衛門手對をる
うとおもうるあきバ。次郎左衛門ハつとうづくまり。全く
もつて手對おどくハ勿体なし。小臣不義の覺る故。
申とけせんそのためと。いひ汝くうしろふ手刈まハし。
ミづうら囚のかさち刈るせバ。人々をるあひ攔止う。
瀬川ハうくと泣たきつ。殿ハ御眉逆だち。御眼おどろ
〳〵きく。誰佩刀を拿来きと。息まき喘きて近従を
喝し。燭臺をちうづけさせ。奪せらきし文おしひらた。
をうくと覧かがしたまへバ。いとも優しき水莖から
で。コハいかに。龍篆鳳章真名の文字。一丁一畫讀下ら
ぬ。海の外風の唐山文章ゆる。さしもの殿も當惑あ

ま。呆きてきばし語おく。顧きバ駿の人の前。予大國と治る身のおきしきの文とさへ誦得ざりしと誚る。世の人口こゝろ〻とゝ〻ゆきと。とおぼえず御顔赧らきしが。さいあき。またいろ〻る隱語とかし。密事ゑ通ぜしもはゝらきどと。かを疑念の解たまはで。幸とあまあ識者ゑ召。いそぎ讀しめたまひける。御側儒者安積潤藏仰を畏て。文をとまあげて讀閲をよ。をゐはちおき。繪の島ふあそび道の記まて。その絶景のおもむゐゑ書ゆらねたるのをふして。別よ何たる仔細かし。まさ燒殘の文を見るふ。その篇全ゝらねども。飛鳥山まて花ゑ看の詩るまを。こゝめの文よい。次郎左

衛門が漆削とふぼしく。處くゐ朱字の書いをあぎやゝ。あのとき瀬川涙ゑぬぐひてうちかしまもう。次郎ぬしふかぎまを。いさくかも漫行しきおとゐけをバ。科のあるべきやうもふし。さいつぶろよまを。あの大磯よ。漢文とかき詩ゑ作くゝることと流行てべるよ。かくるおとしい。殿の好ませたまはぬとおまをゐづら。妾とはじゆ姉妹ゐべてあのをさびゑふんものしさむらふ。次郎ぬしバ。世よままをゐろ博士まを。鎌倉武士の口實よ申侍ゝ。そをおへおの大磯中の妓とも。次郎主の門弟とふらぬものもゐく。をの〻詩つくを文と書て。その草稿どもをバ。次郎ぬしへたのをて。雌黄とう

け侍るき。妾もはさとかけもど文かくさとを好とべる。殿よハかくしまいらせて。文かく道をたどるしもの
から。御目ゑ志のびてまうせしぞや。御恩ふうきるぶ君の御機嫌もいりてる侍まバ。おのことかるい聞え
あげまじとれもひつもど。不意今不義をもせしかと御不審を蒙ふる。そのうへ苟ふも師たる人よ悪
名とはけんおとのかるしさふ。かく明々的よ票しあぐるおそと。涙ともおがとるける。岩代瀑布太頭
とのうう。やよ瀬川どの。さいくをても一應よくもらいぐうさし。得て花柳よハかいろ偽情ハあるふら
ひ。まさう發覺時の逃道よかく陳奪輸の騙局とる。

をるかへらるしとおぼえたり。いでさらバ實否を糺さ
でおくべきうと。おさけれくも。瀬川ぶ調度手筥の類ひ
底とはらつてのこらずうちあけ。あるがうの文どもを一々
あらとめ査ををどさせる濫行ぶとの。文とてハ一通も見
えバさそ。濆文の草稿のる疊そそし堆だがし。儒者
潤藏かくしよる讀見まども。總て鎌倉の名勝を
咏せしものう。さらぞハまと月をうで花ゑ惜らる風
流詞ふをバ。瀑布太も今ハ呆まうへる。佛頂面して
ひうへしいと手もちおく見えふける。ふの間よ近從
のものども。手分して院くの諸姉妹よ。ふのことを聞あ
いせけるよ。瀬川う言葉よをもたがハず。さそがよ大磯

忠臣駿澤死
とうりうをもて
[illegible]と奉て
[illegible]大内介殿
八賢君とる
まらせ此類
ひき功勲成
たるところ

ハ大都の花柳ふまバ大小名さへいらせたまへバいはやいらぞたる。和歌のこゝろ知らで。もろこし人のもてあそぶてふ詩文章のこやるおとゝいさゝかいつハ知らぞ。おもて。姉妹どもゝ駒澤よりきて。おもと學びしハあきらふましとぞ。世の諺よ惡よりけきい善ふもたよしとゝごとく。大内介殿ハいまゞ淫天の悪事行ひたまいねど。ひとそら酒色よ荒ゝたまふ御癖あれバよや。御氣もいとあらゝしく。朝政おこたり。罪ゐ化をおろし。人望をむけとる御ふるまひのゝおほつましゝ。またび瀬川ゞ。次郎左衛門と。とまかいせし文を御覽ぞるよ。絶て艶簡よハあらずして。おごく實明ゐる漢文ゐつましを。一字とても讀下したゝこゝあゝハせらまで。剩その夜他門よりて入こゝたる。稠人よ覩き見られ大きやゝゐる恥辱ゑゝゝとまひ。いゝゝ面目没にばせしよて。たちまち一念発起まし〳〵予いやし〳〵も大國ゑ領し。鎮西の節制と蒙をかゞら。今まで文道を志らざましハ。家の恥。身のとぢ。たとひ隅田川一盃の水ゑ汲盡して。あらふとも。濁をし面ハ清がゝし。とひゝもの昨日の非と悔たまひ。その夜いそぎ御館よ還らせたまひ。詰且齋戒沐浴して。礼服ふあらたゝらを。駒澤次郎左衛門紀春雄ゑ御前よ召を。をゝく席を進ましゝ汝予がたゝをとれもひ。おきまで

幾十の内忠を盡せしこと滿足よおもふぞ。汝ハ家隷
ゐをども。予がたゝの守護神なり。今日より始て
汝を師とし學問を勵むべし。よく〳〵指南ふ〳〵れ
よ。と厚き上意ゑ蒙りける。次郎左衛門おそをいろて。
頭を席ゆうちつけ。おほえを涙とともらくとふぼし。
物負からぬ小臣ゝ寸勞ゑ賞せらる。君さゞうり善
行よをくませたまゝ。上ハ朝廷祖宗の御為下ハ臣
民御仁澤ゑ被ふるんこと。恐悦この上や侍るべき。
と慶賀と叙てまゝん出ぬ。そをよりて大内介殿ハ駒
澤次郎左衛門よ侍講をさせ。且暮たゞ學問ゑ勵ませ
たまふよ。もとよりて聰明比るく。一ゑ十ゑ知らせ

たまふよりて。駒澤ハ浩溥きる。聖經賢傳の内よりて。今
日の經濟よ。用とつべき。樞要の語のをとゑらびて。捷徑ゑ
導びき講〻聞まゐらせしゝうバ。ゐど〳〵惹延ゞごとく。
御上達あらせらる。たのづゝら心と正とを。身と脩られ
て。幕府よ仕まりて御勢いさゝゝも懈たまいず。專ら
仁政ようろゝ民を憫をたまひしほどよ上
の御きとへよろしく。德望遠近よかくをれく。げゝ當世
の賢君まりと。仰ゞをさせたまひしき。ゐを志〻ゐから。
全く。駒澤ゞ方すよりて出て。かく名君よ仕たてあげ
ゐへるりて。前よ駒澤ゞ智略よて。大磯よ漢文かく
まこゑをやらせし。そをよ費用たる金子ども。總て

當家の忠臣冷泉帯刀う計よて雑へ出せしとゝ。
花街弟一の情侠とよゞろく瀬川と托ゝて、非實と不
義ある擧動ゝとゝ為し。漢文をとゝかはせしが必竟
ゝきとゝもて。通明ふる介殿ゝ。諷諫ふせし辛勞ども
ゝ、殿後来くいしく聞召。駒澤が已と屈して。主のたらゝ
かくまで心をいやし。剌志ゞし寃の汚名ゝさへいといで。
遂ゝ得がたき。勲蹟とふせしハ。比類ふき精忠ふとゝ
御感のゝまゝをく重く用ひらゝて。やゞて御擢擧
ゝ、執權の格ゝ加へさせらゝ。もつぱら政事と委たゝ。
さてゝゝ遊君瀬川ハ。いやしゝ一夜妻ゝとゝいへどゝ。
川竹のうゝ身ゝ似氣ふく。よくも駒澤が忠語を諾ひ。

已が真情のかゝりをいたくし。命をさへうゝをず。已ゝ刀下の
死地ゝ入ゝゝゝがら。果して駒澤もろともゝ諷諫とゝし。
課せしハ。世ゝ稀ゝる義婦といゝべし。殿ゝもゝのゝと
ゝふうく賞せらゝ。若干の金子ゝもて。ゝゝが身價と
償ゝハせたまひ。をゝハち御偏房と冊うせたまひけゝ。
德の流行をろゝと置郵ゝして。命を傳ろゝとも速ゝ
ゝゝとゝや駒澤次郎左衛門ハ天賦しゝ博學多才小些も
誇らず緊く篤厚の君子ふゝども。佛家のいハゆる方
便とやらん。兵家ふいへる智略の類ゝて。人意の表ゝる
奇策を出し。さしも手硬き。大猛烈の大内介殿を。さ
らうへして。忽地大賢明の人君とふさしゝ。國家と泰山

の安をゑ置しハ。前代未聞の名臣ぬまと。在鎌倉の士太夫ハ。おのゝころもつぢらさを沙汰ゑて。駒澤が智術德行とぞ稱賛ふける。あるゞ中ゑ駒澤。いまゞ妻ぬしゝ聞て。女子もちたらんほどのをのハ。ゑ聟ゑせんと。手蔓をもとめて。縁談をいひ入る人數おぞをぬし。さまゞもあの駒澤ハ。初宮城阿藤次郎とて。いまゞ浪人ゑて在し時。秋月弓之助が娘深雪といふものゑ。二世ゝけて鸞匹の約束をゝかせしもへ。信仰守ゝとまゞ金石のゝゝ約をべ。さゞかゑ歴ゝの大門戸ゑ。姻姫と請もとめらるゝといへども。おをゝ一槩ゑ推辞をゑて。とゑあへぐりけゑ。おをふゝりて。たまゞゝふハ駒澤氏ハ。さしも徳望人ゝしあをゞ。内心ハ色好ゑて。ゝゝくゝしふべて縁談ないゝまるゝふやゝあやゝしむものもあをき。まゞハ智量ふらき人ふをバいゝ。ぬる望ゝあをて。ゝゝらるゝ。ぬら人ゝ。結句奥ふゝくおもふものもおはかゑ。ゝゝしもゝを。秋月弓之助ハ。主君太宰少貳殿の使節とかね。大番ゑ代ゝて。ふのをゑ鎌倉ふ下ゑ。桐が谷ゑる少貳殿の第ふあゑて。駒澤ぬるものハ。當時無双の豪傑ふゑとにさへ聞。紹介ともゝゝて。一面識とぬゝしゞゝをゝくその人品ゝ慕かの家ゑ親ゝく交加人を央。兄が獨娘深雪と呼るすものを。駒澤どの。其幕の妻ゑ具へ。晋秦の好をゝをバ人と媒妁の人をゝて。叮嚀ゑいゝしむをバ。媒妁の人ハゝを

で。御直參の歴々方よりの縁談御入らきしとへ。駒澤一
樂に固辭たまはんとても此縁をそるまじきよし成
いひ聞せまども。秋月またまた成可を。ゼひとも曲て云
入見らきよ。たとひ足下の勞といたづらふるすとも。これ
拙者が生涯の心やまるまばとあるがちふたのむふぞ。殊
妁人も今い止ことを得をして。あだことにおもらんとハね
もへど。物ハ試にいひ者んと。駒澤に遇てこの告に
けきバ。世にハ楽の外なるみともあるものゝ故。此次郎左
衛門いまど阿蘓次郎たまし時宇治に春戀たる娘の
名を深雪とハ記えしらど。その父の名をきらざまし
はらず。明石の浦の月の夜に。ふしぎと。舟の上にて環

會その時とじめて秋月弓之助が娘といふことを知得と
るふ今かく家老職も發跡たるふぞ遠らず山口へ下り
なバ。かの人ハ程ちゝ筑前ふあまとしたもへバ。そう成
見あハせ。婚姻をもとめんと。不どくその准備せし矢
先かまし。今日ゆんとらず。媒妁の人入来こう。
きうくいひ出せしらば。慌きことかぎまれく。ゆ成念
たして。大宰少貳殿の御内ゆるふとを問究。まずく
安堵て。一議におよばず允諾けるよぞ。とまきかくま
き媒妁ハ事成きるとよろおび。足を空ゆしてこう之助
ぶ宿所に馳回いとはこまらふ。ふのふもむき成告て。慶
を叙ける。弓之助ハいかぐと。殆ぶをもひしふ。かく速に

事どものひたるい。娘深雪がひそうよかたらひをきしことゝ
こゝハ夢よも志らぬゝ。全たく吾耳朶裏の福分なるべし
肚裏よ自負とさへ生じ。とまあへずたくまものして。己が
喜ぶ表ハし。あつく媒人をゝ賞しける。

朝顔日記巻之四　終